

一 般 演 題 抄 錄

## 7. 本邦初の歯根部利用人工角膜 (OOKP) を行った2例

福田昌彦 中尾 彰 馬場貴子 野本裕貴 下村嘉一  
濱田 傑\* 青木宏明\*\* 古賀義久\*\* Christopher Liu\*\*\*  
近畿大学医学部眼科学教室 \*近畿大学附属病院口腔外科  
\*\*近畿大学医学部麻酔科学教室 \*\*\*Sussex Eye Hospital, UK

歯根部利用人工角膜 (Osteo-odonto-keratoprosthesis, OOKP) とは犬歯根部を利用した人工角膜手術方法である。OOKP は、重症のステーブンス・ジョンソン症候群 (SJS) の視力回復の最後の手段として注目されている方法で、30年前からイタリアを中心にヨーロッパで約300例行われている。今回我々は、本邦初となる OOKP を2症例に行ったので報告する。症例1は49歳女性、両眼の眼表面が高度に角化した SJS で、視力は手動弁であった。2003年3月左眼に対し、鼻腔挿管全身麻酔下で、眼表面粘膜切除、口腔粘膜移植、左下犬歯根部を摘出、

人工角膜光学部の固定、眼輪筋内への埋没を行った。2003年6月、移植した口腔粘膜切開、角膜トレパン、虹彩摘出、水晶体、前部硝子体切除、人工角膜を角膜窓に挿入、粘膜下に固定した。術後合併症は認めず、術後1年で左眼視力は矯正1.0に回復した。症例2は68歳女性、14歳時に SJS を発症、視力は手動弁であった。2003年12月左眼に対し第1段階手術を、2004年4月、第2段階手術を行い、術後2ヶ月で矯正視力は0.3に回復した。この方法は今後高度先進医療として申請する予定である。

## 8. 実験的ラット脳外傷モデルにおけるエダラボン (ラジカット) の影響

伊藤龍生 佐藤隆夫 伊藤浩行  
近畿大学医学部病理学教室

目的；エダラボン (ラジカット) は現在、脳梗塞の急性期の治療薬として使用されている。その作用機序としては梗塞後に生じるフリーラジカルの消去や脂質過酸化を抑制するとされている。しかしながらエダラボンの脳外傷治療における有効性は報告されていない。今回、実験的ラット脳外傷モデルを使用しその影響を検討したので報告する。

方法；ラット脳に pneumatic control injury device を用いて脳外傷モデルを作製した。受傷直後にラット尾静脈よりエダラボン 3 mg/kg を1日1回の割合で7日間投与した。無投与群をコントロール群とした。損傷7日及び30日後に屠殺し損傷部位の大きさを測定した。また、脳機能評価として損傷

24時間後と24日後から water maze を行った。

結果；損傷部位の大きさは投与群で損傷後7、30日で対照群に比べて有意に減少していた。脳機能評価では投与群で損傷後24時間からの測定では時間の短縮傾向が見られた。24日後からの測定では投与群で有意な時間短縮が認められた。

考察；脳外傷後に発生するフリーラジカルや過酸化脂質はエダラボン投与により抑制され、損傷部位の面積が減少したと考えられた。脳機能評価で投与群が時間短縮を示したことは損傷範囲が小さく神経細胞や神経ネットワークの損傷が軽度であったためと考えられた。脳外傷後におけるエダラボン投与は脳機能の改善に有効であると考えられた。